Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

# 設立財団ニュースレター

Vol. 4

2014年12月15日発行

ワイルドライフ・マネジメント・フォーラム in 札幌

## 「野生動物と共生する地域づくりを目指して」

2014.11.12 (水)

北海道立道民活動センター かでる 2.7

知 床自然大学院大学設立財団は 2014 年 11 月 12 日 (水)、札幌市の北海道立道民活動センターで、ワイルドライフ・マネジメント・フォーラム in 札幌「野生動物と共生する地域づくりを目指して」を開催しました。

講師の方々の報告やパネルディスカッションでは、ヒグマの事例を中心に地方と都市のそれぞれの観点から、「自然と人が共生する地域づくりにはどうしたらよいのか」「そのための人材をどう養成するのか」を考えました。当日は札幌近郊中心に124名の方に足をお運びいただきました。関係各位の多大なるご協力に感謝申し上げます。(詳報を2~5ページに掲載いたします)



## プログラム(敬称略)

開会あいさつ 田中 俊次

(知床自然大学院大学設立財団代表理事/東京農業大学名誉教授)

来賓あいさつ 川勝 富士男

(北海道環境生活部環境局 生物多様性・エゾシカ対策担当局長)

パネルディスカッション

「野生動物との共存と地域づくり」

問題提起:梶 光一 (東京農工大学大学院農学研究院教授)

「野生動物問題の現状と地域社会」

**報告 1**: 增田 泰 (公益財団法人知床財団事務局長)

「知床におけるヒグマとの共存と地域社会」

報告2:佐藤 喜和 (酪農学園大学教授)

「都市と地方の野生動物共存の考え方~ヒグマの事例を中心に」

報告3:中川 元(知床自然大学院大学設立財団業務執行理事)

「共存を実現する専門職とその養成」

ディスカッション司会:梶 光一

閉会あいさつ:田中 俊次

## 問題提起

### 梶 光一氏 野生動物問題の現状と地域社会



北海道大学で修士号と博士号を取得。30年間にわたりエゾシカ調査に従事し、北海道全域のエゾシカのモニタリングシステムと管理計画を策定する。北海道環境科学研究センター勤務を経て、2006年より東京農工大学大学院農学研究院教授。知床世界自然遺産科学委員会座長として知床のエゾシカ管理計画を策定。日本哺乳類学会理事長。

環境省は 1978 年と 2003 年に 2 回、統計調査をやっているのですが、25 年の間にニホンジカは 1.7 倍、イノシシは 1.3 倍、ニホンザルは 1.2 倍に増えています。一方 1970 年に 50 万人ほどいたハンターが、今 20 万人ほどに減っています。数ばかりでなく、年齢構成も 6 割が 60 歳以上。どんどん管理の担い手が減っている状況があります。その中で、里地里山から人がどんどんいなくなり、耕作放棄地が増えています。これがまた動物たちの住処になっています。

ヨーロッパでもアメリカでも日本でも、狩猟が一般大衆に広まったときの大量捕獲で多くの野生鳥獣が激減しました。その反省からヨーロッパでは猟区制度ができました。一方、北米では州政府が管理人を設定して個体数管理を行う、狩猟を通じた管理の仕組みをつくりました。国を挙げて専門官を育成し、大学で野生動物管理のためのカリキュラムを導入しています。残念ながら日本の場合は法整備を行ってきただけなのです。1963年に狩猟法が改正され「鳥獣保護及び狩猟に関する法律」ができます。要するに保護、乱獲によって減った動物を保護して、狩猟事故を減らすのが日本の法律の主眼だったのです。ですが、動物の数が増えて問題が起こってきている中、今年また鳥獣保護法が改正され、「鳥獣及び管理並びに…」と「管理」という言葉がようやく入ってきました。

国は向こう 10 年間でシカ、イノシシの数を半減する方針を決めていますが、誰がどうやるのか? 半分にしたとしても、知床のシカの個体数管理を考えると、とても問題解決するとは言えない。次は政策的に専門家育成のための予算をつくる必要があるでしょう。それと大学のカリキュラム整備。国をあげて人材育成する仕組みが必要です。人材を保証する認証制度、それもやがて必要になるのではないかと思います。

## 報告

#### 増田 泰氏 知床におけるヒグマとの共存と地域社会



1992 年北海道大学獣医学部 家畜臨床繁殖学講座卒業。斜 里町知床博物館学芸員、斜里 町環境保全課自然保護係長な どを経て、現在知床財団事務 局長・主任研究員。知床地域 の生物調査や自然教育活動、 世界遺産登録業務に携わり、 現在は遺産地域の野生生物保 護管理や調査活動に従事。獣 医師。 私が所属している知床財団は、知床の自然を知り、守り、伝えるというキャッチフレーズで、知床に特化した形で野生動物管理などいろいろな業務をやっています。このキャッチフレーズはクマと共存を目指すためにも同じです。

まず「知る」という部分。相手を知らないと何もできないところがあります。特に ヒグマが特徴的なのは、ものすごく環境に対する適応力がある。例えばシカが増加す る中で、クマはシカを食べ物として利用するようになってきています。春先も越冬で 弱ったシカを襲って食べる。20年くらい前はあまりみられなかったと思います。また マスの定置網まで泳ぐ、舗装道路や暗渠を平然と歩くということも、周囲の環境変化 に適応して変わってきた部分です。

次に「守る」ですが、よくクマと直接対峙しているところの取材を受けますが、実際我々の仕事のほとんどはその手前です。予防であり防御。要はクマに対して強い地域社会をつくるということです。例えばクマを誘引する野生動物の死体の回収、ゴミや人とクマの生活域を分ける電気柵の管理、草刈りなど、とても地道な作業です。

最後に「伝える」。これも知床財団として重要視しています。例えば羅臼町は幼稚園からクマ授業を行い、生態的なことだけでなく、危機管理的なことも含めて繰り返し学習します。斜里だと携帯電話の同報サービス「ほっとメール@しゃり」で情報を出す。その他看板、観光地でのレクチャー、こういう場所でお話するのもそうです。

とは言うものの、なかなかそう簡単に共存が実現するものではありません。折り合いをつけるのは難しいです。最終的にはやはり人の安心、安全を確保する。これが、 人がクマを許容する前提条件となるのではないかと思います。

今知床では、対クマに対して一律のことをやるのではなく、クマの行動履歴(人を追いかけ回した履歴を持っているか。人為的な食べ物に餌付いたような記録があるか。餌をもらったことがあるか)と、実際そのクマが出てきた場所がどこか。国立公園の中か外か、市街地か、農地か。それらによって、実際に対応を変えています。

野生動物と共存するということは、人間の方がかなり手間をかけないといけません。 今までのように魚を干せなくなる。ゴミの管理も徹底しなければいけない。というようなことも出てきます。なかなかまだ共存が達成できているわけではないですが、知 床の実例をご紹介させていただきました。

## 報告 2

## 佐藤 喜和氏 都市と地方の野生動物共存の考え方~ヒグマの事例を中心に



1971 年東京生まれ。北海道大学農学部卒業後、東京大学大学院博士課程修了。博士(農学)。2003 年から日本大学森林動物学研究室、2013 年から酪農学園大学野生動物生態学研究室でヒグマの生態と保護管理に関する研究を続けている。日本クマネットワーク副代表。

今回、私の話では主に札幌市と私の主な調査地、十勝の浦幌町を材料に考えていきたいと思います。十勝では奥山または山麓に住み着いたクマが出没して問題を起こす場合、多くは農地へ侵入して農作物を食べる食害問題です。農家の数が減り、大規模機械化経営ですから、クマが畑に出てもあまり農家の人と出会わない。クマはあまり怖い思いをしないで畑に出て作物を食べることができる。一方都市の札幌市の場合は、奥山、山麓部に市街地が隣接するという景観構造になっています。その結果、クマが出てくると即市街地に出没ということになります。

十勝平野では生物多様性を保全するため、防風林や河畔林はなるべく連続的に残し、野生動物の移動を確保するコリドーの役割が期待されてきました。しかしコリドーを保全すればするほど、そこからシカやクマが市街地まで入ってくる事例も出ています。札幌市も同じように、緑のネットワークをつないで生物多様性を保全しようという考え方があります。しかしこれをつないでいくと、例えば豊平川をつたってクマが市街地まで入ってくる問題も同時に起こる。ですから、生物多様性の保全と野生動物の管理は同時に考えなくてはいけない問題だと思います。

浦幌では出没被害が続くので、地元の方は、山麓のクマは絶対増えていると思っています。ところが奥山を調査すると、1978年と2014年の最新のデータを比べ、増えている様子はない。被害が出るので出没に対して箱わなを設置して駆除する。そうするとこのクマはいなくなる。ところが山は白糠丘陵の奥の阿寒湖、知床半島までつながっていますから、次から次へ他のクマがやってくる。奥山よりも畑の近くの方が生息地として魅力的なので畑の近くに下りてきて、箱わなに入ると駆除される。ということを繰り返します。ただこれを続けていくと、山麓ではクマの数は増えているように見えても、奥山のクマが枯渇したら、奥山も山麓もクマがいなくなるという事態になります。そうなる前にどうにかしませんかという話をしますが、今以上に手間をかける必要は特に感じていないのが実態かと思います。

札幌市では、もう山麓部に繁殖メスが定着していることがわかっています。偶然若いクマが迷って市街地に出る時代ではなく、札幌の山で繁殖しているクマがいつでもそこから出てくる可能性がある。「ここはクマなんている場所ではなかった」「クマが出てきて困る、駆除してくれ」という一方で、「出てきたクマは何も悪くないのだから

駆除しないでくれ」という人までいるいるな意見の人がいます。その中で合意形成をしながら、どうしていくかを考えなければいけない。もちろん状況に応じて駆除も必要だと思いますが、駆除だけでない予防的な対策も同時にやっていくべきです。そこで札幌市がどうヒグマを管理していくのかという「全体計画」が必要になってくるでしょう。しかしそれを作るためクマの動向はまだわからない。科学的な根拠を持った対策を行う必要がありますから、きちんとした生態の調査やモニタリングが重要です。

手間も暇も金もかかる大変な問題ですけれども、このまま何もしないわけにはいかない。国は環境省や林野庁、北海道、市町村、それから地域住民、大学や研究機関、または民間の会社やボランティア団体、一致団結してこの問題に取り組んでいかないと、なかなか解決は難しいかなと思います。

## 報告 3

### 中川 元 共存を実現する専門職とその養成



1973 年北海道大学農学部応 用動物学講座卒業。中標津町 農林課勤務を経て、斜里町立 知床博物館学芸員、知床財団 事務局長、知床博物館館長を 歴任。2013年より、知床自然 大学院大学設立財団業務執行 理事。鳥類を中心に知床の生 物調査や野生生物保護に携わ り 40年になる。知床世界自然 遺産地域科学委員会委員。 他の講師のお話を聞いておわかりのように、野生動物問題は今あまりにも複雑で、奥が深くなってきています。解決するための体制、つまり各地に専門職の配置が必要であり、専門職養成の仕組みづくりが急務だと思います。ではどこで養成するか。これは保護管理の現場が最適でしょう。知床では日々、ヒグマやシカ、他の野生動物、植生の保護、いろいろな問題に取り組んでいます。オンザジョブトレーニングとして勉強する、育てることが可能です。それから調査研究の成果や問題解決の蓄積があり、これも資源になる。このようなことから自然大学院の構想ができました。

知床地域と呼んでいるのは斜里町、羅臼町、標津町、清里町。ここは世界遺産に登録された自然環境や多様な野生生物が生息するだけではなく、農業、漁業、観光業など活発な産業活動が隣接しています。世界自然遺産をはじめ、現在17種類、27のさまざまな保護区もあります。知床地域をもう少し広げてみると、斜里中心に50キロ圏だと10の市町村。100キロ圏、日帰り圏では28市町村。さらにさまざまな自然地域、例えば知床にない広大な湿原や大きな河川などのエリアも入ります。

具体的な知床自然大学院の構想を簡単にご紹介します。主旨目的は「野生生物と人間社会の軋轢を解決し、共存策を担う専門家を養成する」。課程、形態は1専攻の専門職大学院大学を想定しています。学位は修士(専門職)となります。学生だけでなく社会人や留学生も受け入れます。教育内容は、生態学や保全生物学等の自然科学分野はもちるん、野外調査や社会学的な分野も必要でしょう。また地域の合意形成や相互理解を導くファシリテーション能力、コーディネーター能力が必要です。そのような能力を持つ人は、幅広い視野を持つ地域のリーダーになるような人だろうと思います。卒業後の進路は、自治体や国等で野生生物の対策を担当する行政官やあるいは公益法人、企業等の環境関係の部門で働く人、環境NGOや環境教育機関の職員の方など。

現在、専門委員会を設置して具体的な大学院計画をつくっています。こういったフォーラムを開催して、必要性を皆さんにお話しているというところです。実現への行程として、今年と来年で大学院計画を策定し、設立資金を確保しなければなりません。そして文科省への申請をして、順調にいけば 2017 年に開学ができるのではないかという計画です。

私たちの活動は賛助会員の皆さん、支援者の方々の寄附金、これらの浄財によって支えられています。この場を借りてお礼申し上げます。

## パネルディスカッション(質疑応答)

据 光一 (司会) 増田 泰 佐藤喜和 中川 元

### 質問1

共存策を担う専門職の養成が急務なのはよくわかりました。ただそれを本当にすぐやるのなら、例えば近くの網走に東京農大がありますよね。あそこにそういう機能を持たせてやってもらう方が、ゼロから大学をつくるよりは、すぐに育成できるのではないでしょうか。

### 中川 元

おっしゃる通り、知床に一番近い大学は網走の東京農大オホーツクキャンパスです。もちろん私たちはまっさらな大学院を、独自で何が何でもつくるということではありません。いろいろな形で連携や協力関係を保ちながらやるのが現実的なことになるかもしれません。ただこの構想、計画としては、理想的な計画をつくって、独自で行けるプランの中で、どのように協力いただけるかだと思います。農大や酪農学園大学、東京農工大のようにワイルドライフマネジメントをやっている大学があるので、そことの連携は考えていく必要があると思っています。

#### 質問2

駆除するか守るかなど、人間社会の間でどうしたいいかという意見の分かれ、それに対するファシリテーション、そこの苦労は実際どんなものなのか。体験談や事例があれば教えていただけますか。

#### 増田 泰

はい。言葉では言い表せないようないろいろなことがあり、非常に難しいです。地域の中でもいろいろな意見があり、知床の場合は報道も多いので、地域以外からもいろいろなご意見をいただきます。地域向けの発信として最近やっているのは、井戸端会議のような感じで、ざっくばらんに我々がやっているのはこういうことですとお



話して、逆にいるいろな意見をいただいています。住民にはそういうアプローチができるのですが、住民以外の方からは一方的にお電話をもらうということもある。その後のコミュニケーションが難しく、非常に残念な気持ちになることもあります。そのかわりこういう場で、地域以外の方にいるいろなお話をするようにしています。

#### 佐藤 喜和

地域では行政が最終的に判断を下していくので、あまりいるいるな意見が入る前に現場で対応しているというのが現状だと思いますが、外部からいるいるな意見が入ってきて困る現状はあると思います。それをうまく捉えて、きちんと説明できるような根拠を積んでくれればいいというのが私たちの意見です。特に札幌では注目度の高い問題だと思いますから、クマが出てきた段階であまり議論をしてもしょうがないので、もう少し前の段階で、きちんとした根拠を持ち、行政はどういう場合にどういう策をとるということを決めておく。それに関して、いろいるな立場の人の意見を聞いて調整しておくというのができればいいと考えます。

#### 梶 光一

私は以前、道の研究機関でメスジカを中心とする個体数の削減計画の立案に携わりました。メスジカの個体数を減らすことを 72 年ぶりに解禁して 4万頭獲る、という計画を出したときに、非難囂々でした。知事宛に公開質問状が何件も来るということを経験しました。ただ研究者ですので、全てのデータの公開を繰り返してきました。最後は了解をしていただいたと思いますが、相当の摩擦があって、やはり科学的な根拠を持たないと、多様な価値観を持っている方には説明できないと。価値観を超えるにはデータが必要だということを学びました。

## 知床コラム

地元斜里町、羅臼町在住の役員が、知床の今や自然環境について綴ります。

## 知床の漁業

羅臼町在住 理事 石川 勝

熊やら鹿とか陸棲生物との共存が注目されがちな知床ではあるが「天然ブリ、羅臼組合始まって以来の大漁」とか「海の異変、どうなる北海道漁業」といった見出しの新聞記事やTVタイトルが見られる期会が多くなった知床半島の漁業について、従事している漁民感覚からの視点で綴ってみたい。

10年前、世界自然遺産の登録に当たり、我々漁業者は陸上生物のみではなく海棲生物、魚類への規制、すなわち漁業規制が心配でならなかった。

世界遺産委員会による定期的検討はあるものの当面は現状と変わらない、という回答を得た事で、漁民の反対により世界遺産登録が見送られるような事態にならず結果としては幸いだった、というべきであろう。

そして10年を経た今、知床、特に羅臼の「魚」は変わったのだろうか。

知床半島の東側と国後島に挟まれた海域が羅臼の漁民の漁場である。さらに、200 カイリ経済水域が設定されてからは、国後島との中間までしか行けず非常に狭隘な漁場になってしまった。そんな漁場にも拘わらずここ 10 年変わらず、100 億円を超す水揚げを続けられるのは根室海峡の持つ圧倒的な海生生物の生産力を証明している。

しかし、漁獲される魚種を調べると、大きく変わっているのは事実である。

かつて、日本海でニシンが伝説となるほど漁獲されたが、羅臼でも推計ではあるが明治 42 年、3.7 万トンのニシンが獲れた(平成 25 年羅臼の全魚種漁獲量は 4.8 万トン)と言われている。しかし、日本海同様、今はその姿は僅少である。

羅臼の3大魚種、とよばれる助宗鱈(スケトウダラ)、ホッケ、鮭についても、減少が目立ち助宗鱈は10年前1万トンに対し本年6千トン、ホッケは10年前、4千7百トン、まだ終了ではないが本年8百トン、鮭は同様に約2万トン弱に対し本年9千トン強か?といった数字である。

一方、イカを代表例として増えた魚種もある。大正 5 年の 1.5 万トンの記録をピークに減少し一時は全くと言っていいほど、姿を見せなかったのだがここ 10 年来徐々に増加し昨年は 2.4 万トン、羅臼漁獲量の半分を占めるほどの驚異的な水揚げを記録している。

また、冒頭にあるようにブリ、シイラ、マンボウといった南方系の魚は、今までいなかったわけではなく、その来 遊量が増加しているのである。

「まぐろ定置」と、記載されている昭和 26 年の定置漁業免許が手元に残っているが、現在「さけ、いか定置」と して操業している漁場の前身である。

知床、根室海峡が圧倒的な生産力を持つ事は今も昔も恐らく変わりはないであろう。

4月までの流氷による0度の海が1カ月で10度も上昇し、秋にも数日で5度、6度の変化が当たり前のように起こる海など、そうどこにでもあるものではない。

そんな海で増減の原因を論じるのは容易なことではないだろうが安易に温暖化と決めつけてはいけないと思うし、増加はともあれ減少に関して漁師は謙虚になるべきだ、と思えてならない。つまり、減少は自然条件ではなく、多くは人的要因、漁獲圧力による減少ではないか、と感ずるのである。マンモスを滅ぼしたのは人類、との説があるようだが、今の人類も世界中の魚を獲り尽くす術を持っているのは間違いない。しかし、そうすることを許すほど創造主は寛容ではないはずだ。

H26年 晚秋

## 活動報告

学会での発表や、オンライン寄付サイトへの参加についてご報告します。

## 第20回「野生生物と社会学会」犬山大会 に参加しました

業務執行理事 中川 元

2014年10月31日~11月3日までの間、愛知県犬 山市で開催された「野生生物と社会」学会大会に参加し ました。この学会は1996年に「野生生物保護学会」と して発足した比較的新しい学会で、野生生物の生態や保 全・保護管理の研究者、保護管理行政や実務担当者など幅 広い分野の人達が会員になっています。野生生物と人間 や地域社会との関わりに関する研究や課題解決の重要さ が増してきたため、2012年に現在の学会名に改称しま した。私は発足当時からの会員ですが、知床の保全や管 理に関するテーマが取り上げられることも多く、2011 年の17回大会(北海道大会:網走市の東京農業大学オホ ーツクキャンパスで開催)では世界自然遺産の生物多様 性をテーマに公開シンポジウムが開催され、知床へのエ キスカーションが行われました。私たちが開設を目指し ている知床自然大学院の目的である「野生生物との共生」 や「そのための人材育成」はこの学会の主要なテーマで あり、大学院計画を進めるに当たって連携や支援をいた だかなければならない学会です。

昨年 2013 年の大会は兵庫県篠山市で開催され、当財団専門委員でもある横山真弓さん(兵庫県立大学)が大会長を勤められました。この大会では、私と梶理事、大泰司顧問、田中代表理事の共著でポスター発表「野生動物保護管理の現場教育の可能性=知床自然大学院大学構想について=」を行い、保護管理の課題と専門職配置の必要性、専門職の養成を保護管理の現場で行う意味、現場教育の場として知床が適していること等を述べて、学会員と意見交換ができました。

今年の大会は湯本貴和さん(京都大学霊長類研究所)を大会長に犬山市で開催され、私たちは昨年と同テーマの「その2」として、養成する専門職と教育方法、専門職大学院を基本とした大学院の形態や計画概要、教育フィールドとしての広域知床圏について、ポスター発表を行いました。大会では多くのテーマセッションが行われましたが、「生物文化多様性による野生生物と社会の関係分析の提案:バイラテラルアプローチ(企画者:敷田麻実さん)」などは、この学会ならではの興味深い内容でした。大会最終日には日本哺乳類学会など四学会合同企画シンポジウム=「鳥獣保護並びに管理及び狩猟の適性化に関する法律」に寄せる期待と展望=が開催され、各学会からの課題提起や総合討論が行われ、充実した内容でした。

学会では学会誌「野生生物と社会」のほか、「ワイルドライフ・フォーラム」誌を年3回刊行しており、一般販売もしています。フォーラム誌は野生生物と社会を巡る様々なテーマに関して、評論や意見、政策論、大会報告等が掲載されており、大変参考になる内容です(写真下)。学会のウェブサイトから購入可能ですので財団関係者や関心を持たれた方は是非購読下さい。



購入はこちらから http://www.wildlife-humansociety.org/gakkaisi/kounyuu.html

## オンライン寄付サイト

## GiveOne に参加しました!

理事 家村 充尋

そもそも、「オンライン寄付サイトって何?」ですが、 これは「インターネット上のサイトで手軽に寄付できる システム」とでもいうことになるでしょうか。

「 GiveOne (ギブワン)」はパブリックリソース財団が 運営している寄付サイトの愛称です。同財団によれば、

「2001年に開設された日本初のクレジットカードが使えるオンライン寄付サイトの公式アカウント」で「専門家による厳しい審査を経た、信頼できる100団体以上のプロジェクトが掲載されています」となっています。わが知床自然大学院大学設立財団も今年10月からそれら団体の一つとしてサイトに登録されたわけです。

寄付金の受け皿となる運営団体のパブリックリソース 財団が公益財団法人ですので、寄付金は税優遇(所得控除のみ。当財団のような税額控除認定団体ではありません)を受けられます。しかし、指定団体への寄付金送金時に手数料 15%(金融機関及び運営団体)が差し引かれます。従って、「匿名がいい」「個人情報を寄附先の団体に知られたくない」という方や、小口(税制優遇の対象額とならない 2000 円未満)の寄附の場合には有効なファンドレイジングです。(すでに当財団のことをご存じの方や、税額控除をご希望の場合には、直接当財団に送金いただくのがベストです。)

「GiveOne」に登録されると同時に、運営団体から 10 月からの「Eーチャレンジ」という特別キャンペーン月間に参加を求められました。実は3年前から GiveOne の登録団体になるにはこのキャンペーンに参加することが必須条件になったからです。準備には少々手間がかかりましたが、掲示用の写真などは当財団の事務局に手配してもらって良いものを掲示できました。また埼玉県在住のIT関係に強い方にボランティア・スタッフとして加わってもらったことにより、各種協力していただき推進体制を強化できました。

運営団体からは、とりわけSNSの活用をアドバイスされましたが、われわれの場合、一斉メールのほか、既存のホームページと公式フェイスブックに加え、新たに

ブログを立ち上げることにしました。当財団の存在自体 の認知度も一回り大きくなったように思えます。

この1カ月の結果をご報告しますと、延べ11名の方々から、合計57,000円のご寄付を頂きました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また一斉メールを発信させていただいた皆さまのご協力を感謝申し上げます。また、このキャンペーンに参加することで、当財団へ直接寄附金をお寄せいただいた方もいらっしゃいました。いただいたご寄付は大切に使わせていただきます。ただし金額の多寡を云々ではなく、このような形でもファンドレイジングの多様化に努力をしていることを認めていただければと存じます。

日本では、寄付文化の歴史はまだ浅く、税制面の優遇 措置も最近になって整備されてきたといわれます。価値 観も多様化してきており、税金の割り振りだけで社会の 多様な要望に応えることは困難でしょう。政府も市民社 会の自主性を尊重し、多様な公益的事業が立ち上げられ ることを期待し、寄附金に対して税制面でも支援する方 向になってきています。その中でもオンライン寄付とい うのはまだ馴染みが薄いと思いますが、今後はひとつの 手段として活用されていくのではないでしょうか。

E-チャレンジ月間は終了しましたが、GiveOne の登録は継続され、引き続きいつでも寄付していただけるようになっています。新たな寄附プロジェクトを設定することも可能です。また、GiveOne サイトそのものが情報発信機能も持っています。現在は当財団のホームページにも、公式フェイスブックやブログのように、バナーを設置しています。寄付募集活動はこれからいよいよ正念場です。賛助会員の皆様におかれましても、お知り合いの方々に宣伝してください。どうぞよろしくお願い致します。



当財団の GiveOne ページです

GiveOne サイト

http://www.giveone.net/cp/PG/CtrlPage.aspx?ctr=pm&pmk=10383

## ■ 平成26年度第3回理事会を開催しました

日時: 平成 26 年 11 月 16 日(日) 13:00~15:30

場所:ゆめホール知床第2会議室(斜里町)

出席理事は 9 名。平成 26 年度上期の事業進行、財務状況、ワイルドライフ・マネジメント・フォーラム in 札幌の報告のほか、平成 26 年度下期の事業や賛助会員の拡大など検討事項について、活発な議論を交わしました。





## ■ ブログ始めました!

知床自然大学院大学設立財団のブログを立ち上げました。これまでに斜里に出没したトドや渡り鳥の話、漁港でのサケ水揚げの様子などを掲載しました。

ホームページや Facebook と同様に、知床の情報やフォーラム等のお知らせを発信していきたいと思います。

アドレスは http://blogs.yahoo.co.jp/u\_shiretoko です。

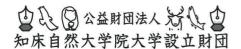
## ■ Facebook でも発信しています!

知床自然大学院大学設立財団は、公式 Facebook ページでも各種情報を発信しています。

アドレスは https://www.facebook.com/pages/公益財団法 人-知床自然大学院大学設立財団/192028480936317 です。

Facebook をお使いの方々はぜひ、「知床自然大学院大学設立財団」団体ページのいいね!ボタンのクリックをお願いいたします。





## 第5回国際野生動物管理学術会議(IWMC)が札幌で開催されます

会期: 2015年7月26日(日)~30日(木)

会場:札幌コンベンションセンター(札幌市白石区東札幌 6-1)

アメリカ野生動物学会と日本哺乳類学会の共催で、アジア初開催となります。アジア地域では絶滅に瀕している野生 動物が多い一方、動物と住民との軋轢が生じている地域が少なくありません。世界の研究者が集い、野生動物と人間 との共存をどのように維持していくのかを考える国際学会です。知床自然大学院大学が目指す教育・研究を考える上で も有意義な機会ですので、関係する多くの皆様の参加をお願いいたします。

会議の内容や参加申し込みは、右記のウェブサイトをご参照ください。http://www.iwmc2015.org/



## 活動を支援してくださる 賛助会員、寄附金 を募集しています

### ■賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通 じて支援するものです。

### ■会員の年会費

個人会員:5,000円 団体会員:10,000円 法人会員: 20,000円

法人特別会員: 100,000 円 ※年度ごとの納入となります。

## ■加入申込み方法

パンフレット付属の「払込取扱票」と「申込書」をご使 用ください。(パンフレットご希望の方は、下記事務局 までご連絡ください)

#### ■賛助会員の特典

当財団のニュースレター、講演会やセミナーの案内情報 を優先的にお送りします。

### ■寄附金について

寄附金も随時募集しています。 賛助会員加入同様にお申し込みください。

## ■主な入金口座について

ゆうちょ銀行 記号 19940 (普) 10138691 (※他の金融機関から 店名九九八 番号 1013869) 北洋銀行斜里支店 店番 452 (普) 3119440 北海道銀行斜里支店 店番 904 (普) 0530326 網走信金斜里支店 店番 003 (普) 0284957 大地みらい信金羅臼支店 店番 003 (普) 1072873

## 設立財団ニュースレター 第4号

発行 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団 〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10 TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

Web http://www.shiretoko-u.jp

発行日 2014年12月15日

本誌掲載記事・写真などの無断転載をお断りします。